

「ありがとう」の手紙

ある年、私は小学校3年生38人の担任をしていた。明るく元気な子どもたちで、教室はいつも賑やかだった。私は子どもたちのパワーに負けないように頑張ろうという思いで、毎日の仕事に臨んでいた。特に38人のプリントやノートを見るのは大変で、丸付けやコメントの記入に時間がかかった。その他にも授業準備や生徒指導、校内外での研修など、様々な仕事に追われ、一日一日を乗り切ることで精一杯だった。

3学期のある日、学級活動の時間に「友達のよさを見つけよう」という活動を行った。ペアやグループになって友達のよさを小さな紙に書いて伝え合うのが主な活動である。予定していた活動を終え、少し時間が余っていたので、私は「グループ以外の友達にもよさを伝えてみよう」と話した。子どもたちは自由にペアやグループになり、よさを伝え合っていた。すると、1人の子どもが私のところに来て、何も言わずに紙を手渡してきた。私は「ありがとう」と言って紙を受け取ったが、その子はすぐに私のもとを離れ、他の子にも紙を渡しに行ってしまった。読んでみると、このように書いてあった。

「先生のいいところは」

わるいことをしたときにしかってくれるところ。

いつもわたしのことを見てくれて、ありがとう。

自分がわるいって、分かってるよ。

全く予想しなかったことが書かれていたことに驚き、思わず読み返してしまった。

振り返ってみると、私はこの子の指導に悩むことが多かった。強気で負けず嫌いな性格で、友達にきついことを言ったり、時には手を出したりすることもあった。その度に指導を重ねてきたのだが、なかなか改善が見られなかった。また、母から「家で言うことを聞かず、困っている」と相談され、「学校と家庭で根気よく声かけをしていこう」と話したこともあった。

驚いた後には、徐々に嬉しさがこみ上げてきた。この子を何とかしたいという自分の思いが伝わっていてよかったと思った。もしかしたら、トラブルがあったときに子どもの言い分を必ず聞くようにし、時には共感したり、悪いことは毅然と指導したりしていたのがよかったのかもしれない。

翌日からは、その子との距離が少し縮まったような気がした。休み時間に話す機会が多くなったり、授業中に目で合図をすると姿勢を正したりするようになってきた。ただし、友達への関わり方が大きく変わったわけではなかったが…。これは、教育の難しさであり、面白さでもあると思う。

「教師から叱られる」という行為は、多くの子が苦痛と感じるだろう。教職に就いて10年以上経つが、叱ったことを感謝された経験はほとんどない。私にとって、これは絶対に忘れられないエピソードの一つである。

その他にも、「分かった」「できた」という声が上がったとき、「勉強、楽しかった」と言われたときなど、教師をしていてよかったと思える瞬間はたくさんある。そのような瞬間が一つでも多く訪れるように試行錯誤しながら、今日も仕事に臨んでいる。